

**[成果情報名]イチゴ「ゆめのか」の高設栽培における基肥窒素施肥量の違いと収量、生理障害果の発生**

**[要約]**イチゴ品種「ゆめのか」の高設栽培における基肥は、窒素成分量で1.5kg/a施肥が1.0kg/a施肥より収量性が高い。先青果および先白果は、基肥窒素施肥量に関わらず発生する。

**[キーワード]**イチゴ、ゆめのか、高設栽培、基肥窒素

**[担当]**長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

**[代表連絡先]**電話（代表）0957-26-3330

**[区分]**野菜

**[分類]**指導

**[作成年度]**2013 年度

---

**[背景・ねらい]**

イチゴ「ゆめのか」は、収量性が高いことおよび輸送性に優れることから作付け面積は増加傾向にあるが、本県の栽培環境条件に応じた栽培技術は確立されていない。

そのような中、長崎県型イチゴ高設栽培システムにおける品種探索試験では、標準品種「さちのか」に準じ基肥窒素施肥量を1.5kg/aで実施してきたことから、「ゆめのか」の収量性に適した基肥窒素施肥量は明らかでない。また、「ゆめのか」は大果に先青果が若干見られるとされる（愛知農試研報第37号）が、一般に窒素過多条件が先青果の発生を助長する要因の一つとされることから、窒素施肥量と先青果等生理障害果の発生について検討する必要がある。

そこで、「ゆめのか」の長崎県型イチゴ高設栽培システムにおける基肥窒素施肥量と収量および生理障害果、特に先青果、先白果の発生について検討する。

**[成果の内容・特徴]**

1. 普通ポット栽培および暗黒低温処理栽培における総収量は、基肥窒素を定植前に80%、マルチ前に20%の割合で施肥する場合、基肥を1.5kg/a施肥することで高くなる（図1、2）。
2. 総重量に占める先青果および先白果の発生率（総果数比）は、作型では普通ポット栽培が暗黒低温処理栽培よりも高い傾向となり、発生は基肥窒素施肥量の違いに関わらず見られる（図3）。

**[成果の活用面・留意点]**

1. 頂花房の花芽分化が平年比で2011年は3～5日程度早く、2012年は3～5日程度遅れた年の成績である。
2. 高設栽培における基肥窒素量1.5kg/a以上の施肥および分施比率についての試験は、現在実施中である。

## [具体的データ]

### 試験区の構成

作型	試験年次	基肥窒素施肥量 kg/a	施肥割合 (定植前:マルチ前)
普通ポット栽培	2011年および2012年	1.0	8:2
		1.5	
暗黒低温処理栽培	2012年	1.0	8:2
		1.5	

### [耕種概要]

- 定植 普通ポット栽培 2011年9月18日、2012年9月24日  
暗黒低温処理栽培 2012年9月11日
- 基肥 定植前施肥 イコロンクハワー (N-11)、マルチ前施肥 スーハールエロンク 424 (N-14)
- 栽植株数 株間20cm、2条植え、700株/a
- 追肥(総N施肥量) 2011年 OKF-1 (N-15) を主に0.17Nkg/a、2012年 OKF-1 を0.11Nkg/a
- 環境制御 電照(光中断)、加温(設定温度7.5℃)、培土加温(16℃設定)

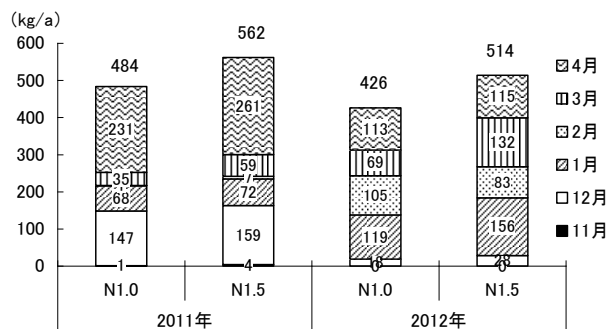


図1 普通ポット栽培における基肥窒素施肥量と収量  
(高設栽培、施肥割合8:2)

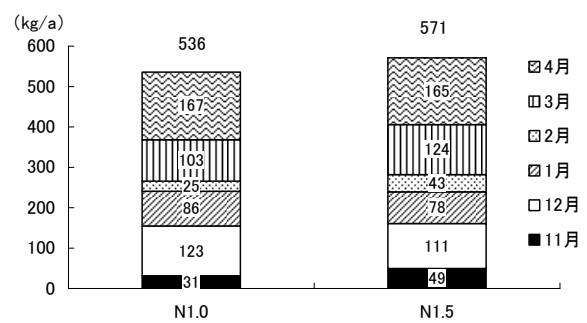


図2 暗黒低温処理栽培における基肥窒素施肥量と収量  
(2012年、高設栽培、施肥割合8:2)

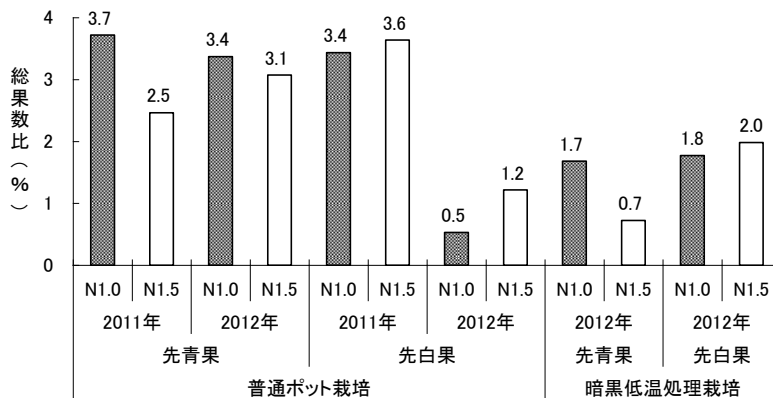


図3 各作型における基肥窒素施肥量と先青果、先白果発生率  
(高設栽培)

## [その他]

研究課題名：「ブランド・ながさき」農産物育成事業、ながさきオリジナル品種育成促進事業

予算区分：県単

研究期間：2009～2011年度、2012～2014年度

研究担当者：野田和也